

原 著

ミルトンにおける死(3) 第一部  
—— *An Epitaph on the Marchioness of Winchester* と  
Jonson の *An Elegy* との比較 ——

武 村 早 苗

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成 8 年11月20日受理)

Death in Milton (3) Part I  
—— A comparison of *An Epitaph on the Marchioness of  
Winchester* with Jonson's *An Elegy* ——

Sanae TAKEMURA

*Department of Medical Social Work  
Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-01, Japan  
(Accepted Nov. 20, 1996)*

Key words : Jonson, Lady Jane, virtue, praise

Abstract

Ben Jonson wrote *An Elegy on the Jane Paulet, Marchioness of Winton* who died at an early age. John Milton also dedicated *An Epitaph* to the Marchioness. The plan is to compare the elements of their poems: the idea of death, the idea of praise and the images. This first of a two-part study discusses the background and the characteristics of Jonson's *Elegy*.

要 約

Ben Jonson は若くして亡くなったウインチェスター侯爵夫人に追悼のエレジーを書いた。同じ貴婦人にあてて John Milton も追悼詩を捧げている。筆者の計画は、死と賞讃についての二詩人の見解や詩のイメージを考察することにより、二人の詩を比較検討することである。今回はまず第一部として、Jonson の *An Elegy* の背景や特徴について論じたい。

## はじめに

二人の詩人を比較するにあたって、Ben Jonson (1572—1637) とミルトン (1608—1674) の関係を簡単に述べておきたい。ミルトンが生まれたとき Jonson は既に36歳。Shakespeare は Jonson より8歳年下で、年齢からみると Shakespeare の方が Jonson に接近している。

Jonson は Shakespeare につぐ大劇作家として、また桂冠詩人として、学識あふれる喜劇、新古典詩、官廷仮面劇、悲劇、反清教徒的諷刺などを勢力的に著作し、多方面にわたって活躍した。若いときは悲劇役者であった。

ウインチェスター侯爵夫人への追悼詩が書かれたとき、Jonson は晩年に近く、ミルトンは22歳の大学生であった。彼は大先輩の博学と劇作の才能に敬意を表して、彼の詩 (*L'Allegro*) の中で Jonson に言及している。ある研究者の推測によれば、ミルトンが St. Paul's School で学んでいたとき、先生の Alexander Gill を通

じて個人的に Jonson の作品に魅かれた様子である<sup>1)</sup>。したがって二人の詩人の距離は、ミルトンの方が一方的に Jonson を仰ぎ見る関係であったと思われる。

次にこの追悼詩が書かれたいきさつを記したい。ウインチェスター侯爵の妻 Jane Paulet は1631年4月15日、23歳の若さで亡くなった。夫の名は John Paulet、ローマン・カソリックで Charles I の治世においては著名な王党派であった。夫人は15歳で結婚し7年後に第一子を得た。二番目の子供を妊娠中、頬にできた腫れ物の切開を受け、感染のため死去した。子供は死産であった。

Cambridge の名誉総長が夫人の親類であったので追悼の詩集が企画されたようである。その中でミルトン、Ben Jonson、William Davenant 他の詩が現存している。侯爵は夫人の死後43年生きて1674年に死去。Dryden が侯爵のために墓碑銘を刻んだ<sup>2)</sup>。

## 1

*An Elegy on the Lady Jane Paulet, Marchioness of Winton*<sup>3)</sup>

What gentle ghost, besprent with April dew,  
 Hails me so solemnly to yonder yew,  
 And beckoning woos me, from the fatal tree  
 To pluck a garland for herself, or me?  
 I do obey you, beauty! for in death  
 You seem a fair one. Oh, that you had breath  
 To give your shade a name! Stay, stay, I feel  
 A horror in me, all my blood is steel!  
 Stiff, stark, my joints 'gainst one another knock!  
 Whose daughter? — ha! Great Savage of the Rock? 10  
 He's good as great. I am almost a stone!  
 And ere I can ask more of her, she's gone.  
 Alas, I am all marble! Write the rest  
 Thou wouldst have written, fame, upon my breast:  
 It is a large fair table, and a true,  
 And the disposure will be something new,  
 When I, who would her poet have become,  
 At least may bear the inscription to her tomb.  
 She was the Lady Jane, and Marchioness

Of Winchester — the heralds can tell this: 20  
 Earl Rivers' grandchild — serve not forms, good fame,  
 Sound thou her virtues, give her soul a name.  
 Had I a thousand mouths, as many tongues,  
 And voice to raise them from my braven lungs,  
 I durst not aim at that: the dotes were such  
 Thereof, no notion can express how much  
 Their carat was ! I or my trump must break,  
 But rather I, should I of that part speak !  
 It is too near of kin to heaven, the soul,  
 To be described; fame's fingers are too foul 30  
 To touch these mysteries. We may admire  
 The blaze and splendour, but not handle fire !  
 What she did here by great example well  
 To enlive posterity, her fame may tell;  
 And, calling truth to witness, make that good  
 From the inherent graces in her blood !  
 Else, who doth praise a person by a new  
 But a feigned way, doth rob it of the true.  
 Her sweetness, softness, her fair courtesy,  
 Her wary guards, her wise simplicity, 40  
 Were like a ring of virtues 'bout her set,  
 And piety the centre, where all met.  
 A reverend state she had, an awful eye,  
 A dazzling, yet inviting majesty:  
 What nature, fortune, institution, fact  
 Could sum to a perfection, was her act !  
 How did she leave the world, with what contempt !  
 Just as she in it lived, and so exempt  
 From all affection. When they urged the cure  
 Of her disease, how did her soul assure 50  
 Her sufferings, as the body had been away !  
 And to the torturers, her doctors, say,  
 Stick on your cupping-glasses, fear not, put  
 Your hottest caustics to, burn, lance, or cut:  
 'Tis but a body which you can torment,  
 And I into the world all soul was sent !  
 Then comforted her lord, and blessed her son  
 Cheered her fair sisters in her race to run,  
 With gladness tempered her sad parents' tears,  
 Made her friends' joys to get above their fears, 60  
 And, in her last act, taught the standers-by  
 With admiration and applause to die.

Let angels sing her glories, who did call  
     Her spirit home to her original;  
 Who saw the way was made it, and were sent  
     To carry and conduct the complement  
 'Twixt death and life; where her mortality  
     Became her birthday to eternity.  
 And now, through circumfusèd light, she looks  
     On nature's secrets, there, as her own books: 70  
 Speaks heaven's language, and discourseth free  
     To every order, every hierarchy;  
 Beholds her Maker, and in him doth see  
     What the beginnings of all beauties be,  
 And all beatitudes that thence do flow:  
     Which they that have the crown are sure to know.  
 Go now, her happy parents, and be sad,  
     If you not understand what child you had;  
 If you dare grudge at heaven, and repent  
     To have paid again a blessing was but lent 80  
 And trusted so, as it deposited lay  
     At pleasure to be called for, every day;  
 If you can envy your own daughter's bliss  
     And wish her state less happy than it is;  
 If you can cast about your either eye,  
     And see all dead here, or about to die;  
 The stars, that are the jewels of the night,  
     And day, deceasing with the prince of light,  
 The sun; great kings and mightiest kingdoms fall;  
     Whole nations, nay mankind, the world, with all 90  
 That ever had beginning there, to have end /  
     With what injustice should one soul pretend  
 To escape this common known necessity;  
     When we were all born, we began to die;  
 And, but for that contention and brave strife  
     The Christian hath to enjoy the future life,  
 He were the wretched'st of the race of men:  
     But as he soars at that, he bruiseth then  
 The serpent's head; gets above death and sin,  
     And, sure of heaven, rides triumphing in. 100

ウイントン侯爵夫人 レイデイ ジェーン ポーレットに捧げる悲歌

四月の露を身にあびて、優しい亡霊が向うの  
 イチイに来るように厳かに私に挨拶する。

彼女の手招きは不吉な木から花環を取れと  
せがんでいる。それは彼女の為？ 私の為？  
貴女の言うとおりにしよう。美しい女性よ！  
死んでも美女の亡霊だ。あ、名前を告げる  
息があればよいのに！ 待て、恐ろしくて  
全身の血が鋼鉄になる！  
骨と骨がぶつかって激しく音をたてる！  
一体、誰の娘なのか？ なんと！ 偉大なサヴェジ  
子爵の令嬢なのか？ 父上は立派で善良な方だ。  
私は石になりそうだ！ さらに尋ねぬうちに  
彼女は消えた。あわれ、私は全身大理石になった！  
名声よ、汝が書くはずであった残りの話を  
私の胸に書いてくれ。大きく汚れない真実  
の銘板に。そうすれば新しい語り方になるだろう。  
彼女の詩人になれなかった私が、少くとも  
彼女の墓石の銘を担うときには、  
彼女はレディ ジェーン、ウインチェスター侯爵  
夫人—— 紋章官が告げる。リヴァーズ伯爵  
の孫—— 名声の女神よ、肩書などどうでもよい、  
夫人の美德を伝え、魂にこそ名をあたえよ。  
たとえ私に多くの舌、千の口、真鍮の肺から  
叫ぶ声があろうとも、私の力ではおよばない。  
彼女の天性は何カラットか測れない。  
私か私のトランペットが壊れるにちがいない、  
むしろ私の方が壊れるだろう、  
彼女の魂について語るならば、  
魂は神に近すぎて描写するのは不可能だ。  
これらの神秘に触れるには名声の指先は  
汚らわしい。人は炎や輝きを賞讃するが  
火に触れるのは好まない。  
夫人がこの世でした事を、立派な手本によって  
彼女の名声語るだろう、後世の人を勇気  
づける為に。真理を証人として呼びだして、  
それが彼女の生来の魅力であったと〔私が〕  
証明しよう。さもなくば新しいが偽りの方法で  
他人を賞讃する人は真の賞讃をも奪うのだ。  
夫人の優しさ、柔和さ、美しい思いやり、  
用心深さ、賢明な単純さは、  
彼女をとりまく美德の輪のようであった。  
そうしたすべての中心に敬虔があった。  
夫人には尊い威厳があった。まぶしいが  
人を魅きつける畏敬の眼差があった。  
自然、運、教育、気高い行いが

完成に達したものが夫人の人生であった。  
 どんなに軽蔑しつつ、この世を去ったことか！  
 まさにこの世に生きていた様に、あらゆる  
 情熱から逃れて、病気の治療が促された時、  
 夫人の魂は彼女の苦痛をいかに和らげたことか、  
 あたかも身体が無いかのように！  
 拷問者である医者に向い彼女の魂は言った、  
 恐れずに吸い玉を押しつけなさい、焼いたり  
 切開するために熱い焼灼剤を用いなさい、  
 医者が苦しめるのは身体だけだ、  
 私は完全に魂となってあの世へ送られた！  
 それから〔夫人〕は夫を慰め、息子を祝福し  
 美しい姉妹に家を継ぐよう元気づけ、  
 悲しい両親の涙を喜びでやわらげ、  
 友の喜びに友の怖れを克服させ、  
 そうして最後の幕で、賞讃と喝采でもって  
 死ぬことを居あわせた人々に教えた。  
 天使たちに夫人の栄光を歌わせよ、  
 天使が彼女の霊を元の住み処に呼んだのだ。  
 彼等は霊が造られた方法を知っていて、  
 彼女の霊を運び導くために送られた、  
 死と永遠の命の間で、そこでは彼女の死は  
 永遠への誕生日となるのだ。  
 そうして今や、降りそそぐ光の中で  
 彼女は自然の秘密を読む、自分の書物のように、  
 天の言葉を話し、あらゆる階級の  
 天使たちと自由に語りあう。  
 造り主を見、あらゆる美の起源となっている  
 物やそこからすべて流れでる至福を彼の中  
 に見る。それらは〔生命の〕冠を頂く者が  
 必ずや知るべきことである。  
 さあ、行け、幸せな両親よ、そうして悲しめ、  
 どんな子供を持っていたか解らないならば。  
 もし天を恨んだり、子供という祝福を  
 支払ったことを悔やむならば——その祝福は  
 貸しだされ、預けられたものにすぎず、  
 神がいつでも召されるものなのだが。  
 もし娘の至福をねたみ、  
 彼女が今よりも幸薄かれと願うならば、  
 もしお二人が目を注ぎ、  
 あらゆる死者と死にゆく人を見るならば、  
 夜の宝石である星々と光の君主、  
 太陽とともに暮れる日を見るならば、

偉大な王と堅固な王国も倒れるのを見るならば、  
 すべての国家、全人類、この世界には終りが  
 ある——始まりを持つすべてと共に——の  
 見るならば、いかに正義を曲げようとも、  
 一人だけがこの必然から逃れることが  
 できようか。生まれた時から死が始まる。  
 来世に行くためキリスト教徒が遭遇する  
 人生の葛藤や勇氣ある戦いなくしては  
 その人は人類の中で最も憐れむべき存在と  
 なる。しかしキリスト教徒が来世に昇る時、  
 彼は蛇のかしらを砕き、死と罪を超え、  
 必らず天国に凱旋するであろう。

90

100

## 2

冒頭からいきなり Lady Jane の亡霊が現われる。日本なら柳と幽霊の組合せが一般的だが、西洋ではイチイ(yew)が死を連想させる樹木である。なぜならイチイは墓地によく見られる常緑樹で、その葉には毒が含まれているからであるらしい<sup>4)</sup>。亡霊は詩人に向けて手招きをする。ちょうどハムレットの父の亡霊が息子に手招きしたように、ホレイショーが亡霊を見て「身の毛がよだつ」ほど恐ろしかったように、詩人も恐怖のあまり血が凝固し(all my blood is steel)、骨と骨がぶつかってガタガタと鳴る。Jonsonの恐怖の比喩は、血が鉄になり、身体が石になり、次に大理石になるというふうに、身体が物体に変化していく点でギリシャ神話に似ている。具象的で大げさで面白味がある。夫人の亡霊がハムレット王の亡霊と違う点は、その表情が優しく、とびきりの美女であるということだ。亡霊の手招きに応じて詩人が彼女に近づき、名前をたづねたところで亡霊は消える。遠景から近景に移る描写の技が心憎い。

亡霊を見たショックと Lady Jane の高貴な家柄を知った驚きによって、彼は大理石に変身してしまう。今や大理石である詩人はみづから墓石となって、彼女の墓碑銘が刻まれることを願う。鋼鉄→石→大理石→墓石という変身の図式には、Jonsonの計算された wit が感じられる。同時に詩人が墓石になって、そこに夫人のエピソードが書かれるという発想は、詩人にと

って最もふさわしい敬意の払い方である。

以上1~18行は、いわば、この詩の前置きである。19行目から墓碑銘をなぞって‘She was the Lady Jane, and Marchioness/Of Winchester...’と始まる。次に夫人の家柄と美徳が区別され、「家柄よりも美徳について声高らかに伝えよ」と詩人は名声の女神に懇願する。彼の言葉を受けて、のちほど夫人の美徳が長々と語られる(39-62行)。一方、魂についてはどうであろうか。詩人は魂について語る資格がないと卑下している。「魂は神に近すぎて詩人には描けない」と、美徳は人間の領域だが魂は神の領域に属するという論理である。しかし a thousand mouths, many tongues, brazon lungs, carat, trumpet などの「耳にひときわ強く訴える」語を見ると、描写を否定してみせることによって逆に夫人の魂を讃美しているのではないかと思いたくなる。

最初の18行に導かれて、魅力的な亡霊に興味を抱きはじめて読者は、魂の讃美に関する、やや理屈っぽい弁解に出くわして少し興味をそがれてしまう。この感覚を Stanley Fish は次のように説明している。「Jonsonは主題の方向を探すのに詩の1/3を費やすことがある。読者はまず詩の中に招き入れられ、敷居に足を乗せた途端に〔詩の中に入る〕資格についてのリハーサルに出会う<sup>5)</sup>」と。賞讃を扱った Jonson の詩にはこの傾向が強いらしく、「Jonsonを plain style の詩人であるとは到底呼ぶことはできない、もし彼の詩が、その対象を描くのは不可能だ、と

絶えず宣言しているならば<sup>6)</sup>」とも述べている。

しかしながら、この点について Jonson を弁護する意見もある。O. B. Hardison は「合理主義者そして新古典主義者として」、「Jonson は詩の限界を定義している<sup>7)</sup>」と言う。このような Jonson のスタイルを「慎み深い」ものとして、Hardison は好意的に受けとめている。

結局、21—38行は Lady Jane に対する賞讃というよりも、むしろ賞讃についての Jonson の考えが示されているのではなかろうか。彼は大きな作品を次から次へと個人のパトロンに捧げている。それは彼等から経済的な援助を受けるためばかりでなく、演劇の文学的地位を高めるためでもあった。しかし、元来、諷刺的な気質が勝っていた彼は、讃めるよりも笑いものにする方が得意であつたらしい<sup>8)</sup>。パトロンに対しては絶対に許されない振舞いであつたらうが。したがって、これらの詩行は賞讃の表現について深く考えざるをえなかった、Jonson の苦心の跡を残していると言ってもいいだろう。

39—46行には Lady Jane の美德が抽象名詞によって並べられている。Jonson の場合、「友人であれパトロンであれ、讃辞を受ける対象は個人としてではなく、美德のタイプとして描かれた<sup>9)</sup>」と言われるごとく、ここにも、一般に貴婦人が備えているべき美德の鑑が歌われている。美德の中で詩人が最も高い評価をあたえるのは敬虔である。「自然、運、教育、気高い行いが完成に達したものが夫人の人生であつた」という表現は、わずか2行で完璧な侯爵夫人像を描いて見事である。

Lady Jane の美しさと優雅さについて、当時 Howell なる人物——彼は夫人がスペイン語を習うのを手助けしていた——が夫人に宛てて興味深い手紙（1626年3月15日）を書いている。「完全な女性という真の手本を作るにあたって、自然と恵みがその宝と技をすっかり使い果たしてしまった<sup>10)</sup>」と。この言葉は不思議なくらい Jonson の賞讃と似ている。ちなみに「美德、敬虔、学問の伴わない肩書や家名は無意味である」というのが Jonson の信条であつた<sup>11)</sup>。1631年4月21日のニューズレターが、令婦人の早すぎる死についての社会の反応を報じている。「侯

爵夫人の悲しい死によって、世間一般の人々がめったにないほど多くの哀惜の情をかきたてられた<sup>12)</sup>。」

49—56行の治療の場面には、17世紀の病院を想像させるだけの reality がある。これまでの平和で穏やかな調子が、一転して激しく力強い零囲気に変る。Cupping-glasses, caustics, torturers, burn, lance, cut などの語が近代的な麻酔もなかった頃の外科の治療を思わせる。治療の暴力的なイメージに Lady Jane の美しいイメージが重ねられて metaphysical な表現となっている。もっとも Hardison は「死に向う夫人の態度の描写は witty というよりも殆ど metaphysical だ<sup>13)</sup>」と述べているが、彼は、夫人が100%魂となって来世に送られる神秘性に言及しているのであろう。治療の場面においてのみ、夫人が一人称で語っている事実に注目したい。‘And I into the world all soul was sent!’ という誇らかな一言によって彼女が死を超越したことが明らかにされ、悲壮感が和らぐ。家族との別れの光景はリアルな描写を保ちつつ、調子は静かで落ち着いたものになる。

Lady Jane の魂が天国に迎えられる時、プラトニズムにキリスト教が加味されている。夫人の魂は身体という牢獄から解放されてイデア界に行く。そこには既に天使が住んでいて、夫人の魂を下界から導く役目をする。ここで彼女は生まれ変わり永遠の命を得る。天国における至福の vision はとても淡々と描かれている。Lady Jane の姿は霞んでしまい、天国が散文的にまた論理的に紹介される。

両親に語られる慰めの前半は Jonson らしい wit のきいた、やゝ屈折した表現が見られる。中心のアイデアは「神を恨んではいけない」という教訓である。慰めの後半は「生あるものは必ず死ぬ」という自然の定めが、太陽、星、王国の運命、国家、人類、世界などの巨大なイメージを使って描かれる。しかし、これらの無常観がもたらす「ペシニズムの効果は、永遠の生命を意気揚々と肯定することによって打ち消され、そこで詩が終る<sup>14)</sup>」のである。この終り方は特に Lady Jane を対象にしているとは考えにくい。一般のキリスト教徒に送られる伝統的な

メッセージと解される。

### 結 び

以上の検討から言えることは、*An Elegy* が緻密な構成を持っているという事実である。亡霊の出現——Lady Janeの紹介——夫人の賞讃(魂、美德、行為)——天国——両親への慰め——無常観——永生の順に長さのバランスも程良く、詩の半ば(56—57)にクライマックスが配されて、さすが老成した劇作家の作品だと思わせる。

他に劇作家らしさを感じさせられる点は(1)冒頭における亡霊の登場の仕方が舞台におけるそれと似ている。(2)「誰の娘か?」「なんと! サヴェジ子爵の令嬢か?」と自問自答したり、Lady Janeが医者に話しかけるなどセリフの要

素が入っている。命令形の多いのもそのせいだろう。(3)日常の行為がリアルに描かれている。

前半がドラマティックであるのに反して、後半は平板となり、葬式の説教に似た感じがする。夫人の存在感が終りになるほど薄れていくのも残念である。しかし、彼女が大勢のキリスト教徒の代表として歌われたと考えれば、*An Elegy* は Lady Jane に最も高い讃美を送ったことになる。最後に *An Elegy* は賞讃についての Jonson の哲学をも表わしている。

### 謝 辞

*An Elegy* を訳出するにあたり、元本学教授 Mary F. McCrimmon 先生の丁寧なご指導を頂いた。ここに深く感謝の意を表させていただきます。

### 文 献

- 1) Hunter WB (ed) (1978) *A Milton Encyclopedia*, Associated University Presses, Inc., New Jersey, vol. 4, p170.
- 2) Jane Paulet に関しては次の文献を参照した。Todd J. Henry (1852) *The Poetical Works of John Milton*, Rivingstons, London, vol. IV, p282. Masson Davdi (ed) (1890) *The Poetical Works of John Milton*, Macmillan and Co., London, vol. 1, p129. Parker WR (1949) Milton and the Marchioness of Winchester. *The Modern Language Review*, 44, 548. *A Milton Encyclopedia*, vol. 3, p63.
- 3) テキストとして、Donaldson Ian (ed) (1985) *Ben Jonson*, Oxford University Press を使用した。以後 *An Elegy* と略する。
- 4) *Ibid.*, p709.
- 5) Fish Stanley (1984) The Brave Infant of Saguntum: The Self in Jonson's Verse In: Bloom Harold (ed) (1987) *Modern Critical Views BEN JONSON*, Chelsea House Publishers, New York, pp191—192.
- 6) *Ibid.*, p197.
- 7) Hardison OB (1962) *The Enduring Monument*, The University of North Carolina Press, p144.
- 8) Key W. David (1995) *Ben Jonson*, Macmillan, London, p130.
- 9) *Ibid.*, p126.
- 10) Todd, *op. cit.*, vol. IV, p282.
- 11) Key, *op. cit.*, p129.
- 12) Masson, *op. cit.*, vol. 1, p129.
- 13) Hardison, *op. cit.*, p143.
- 14) *Ibid.*, pp144—145.
- 15) *Ibid.*, p145.